

# 希望を生む場所は

## 「居場所」かもしれない

子どものエンパワメントいわて 代表理事 やまもと 山本克彦さん かつひこ

仮設住宅に住む生徒たちに「学ぶ場」を提供したい。  
そんな思いでスタートした

「子どものエンパワメントいわて」。

らでいっしょにやで集まった寄付金の一部は

この活動費、維持費に使っていただいています。

現在は勉強の場だけでなく、交流の場、

心を癒す場、そして大切な「居場所」として

多くの役割を果たしています。

同団体代表理事の山本さんにこの場と

子どもたちの心の関係についてうかがいました。

### 「学びの部屋」とは？

震災によりさまざまな影響を受けた子どもたちに寄り添うことを目的に、2011年10月に設立された学びの部屋。仮設住宅で勉強する場所がない、大切な家族や友人を失った、そんな子どもたちの居場所を学び、交流、相談の場としての役割を担っています。子ども自身の意志や気づき、自主性を尊重し、大人が寄り添うことを「エンパワメントアプローチ」と呼び、子どもたちが再び自分の夢を描き直す手助けをしています。  
現在陸前高田市、大船渡市、住田町、釜石市、宮古市の5市、計16箇所を中心に「学びの部屋」を設けて活動しています。



授業のほか、レクリエーションや、ゲームなど、思い思いの時間を過ごします。活動について詳しくはホームページでもご紹介しています。

<http://www.epatch.jp/>

子どもが解放される場所を！

居場所があつて、自分がある

「学校や塾と、「学びの部屋」の違いは、子どもたちに力や学力を与える側(大人)と、与えられる側(子ども)という構図をとっていないことです。そもそも力は子どもたちの中にあつて、自分の力に気づく「居場所」でありたいと思っています」山本克彦さんは、「学びの部屋」の機能について語ります。

3.11を境に、岩手の子どもたちを取り巻く環境は大きく変わってしまいました。学校が避難所になり、運動場が駐車場になり、津波によって家族や友人を失った子どもも多くいました。子ども一人の力では、とても夢など持ちようがない。そんな絶望を目のあたりにした山本さんは、子どもたちが解放され、安心できる学びの場として「空間、時間、仲間、学びの部屋」という4つの「間」を提供する「学びの部屋」を開きました。子どもたちに寄り添う職員、勉強を教えにきてくれるボランティアの大学生などの協力を得て、さまざまな状況にあった子どもたちが、徐々に学校でも見せないような笑顔を見せてくれるようになったそうです。

「「学びの部屋」を開いて気づいたことは、悲しみを表現することも、自分の希望を口に出すことも、子ども自身が解放された状態でなければ実現しないということです。子どもたちが心からくつろいで、何かを自分の意志でやってみて、個別の選択が生まれる。それが「居場所」にしかできないことだと思います」と、山本さん。

人も町も環境も、あれほどの大災害から立ち直ることは容易ではありません。山本さんは「復興とは何ですか?」という質問に、「元に戻るのではなく、未来に追いつくことではないでしょうか」と答えてくれました。子どもたちの心を震災の前に戻すことはできません。だからこそ、新しい環境と夢を創り出す力と、支える力が、この先も長く求められているのです。



山本克彦(やまもと かつひこ)

一般社団法人子どものエンパワメントいわて代表理事、日本福祉大学福祉経営学部医療・福祉マネジメント学科准教授、中学校教員、YMCA勤務などを経て、社会福祉学を学び、大学教員に。子どものエンパワメント事業に精力的に取り組む。